E-1　スロッピー解釈の三つの出自

森山倭成 (神戸大学人文学研究科博士課程前期課程)

1. はじめに

<目的> 日本語の空項におけるスロッピー解釈の因子の同定と空項分析への示唆

(1) はストリクト解釈およびスロッピー解釈の両方を許容する空項の例 ([e] は空項箇所)
(1) 太郎は自分の本を読んだ。花子も [e] 読んだ。　(ストリクト解釈/スロッピー解釈)

空項現象に対する二つの分析
・省略分析：VP 省略などの省略現象と同じ方法でスロッピー解釈を導く (第 2 節)。
・代名詞分析：省略とは区別される代名詞の性質によるスロッピー解釈
⇨ 両者は現在でもしばしば論争になっており (Oku 1998, Hoji 2003 など)、日本語の空項におけるスロッピー解釈については議論の余地がある。

<論点 1> 日本語のスロッピー解釈は実際のところどのような方法で導かれるのか。
<主張 1> スロッピー解釈の因子：① 束縛変項、② 同一指示、③ 話者の知識

<論点 2> 上記の因子の存在は省略分析、代名詞分析に対してどのようなことを示唆するか。
<主張 2> 空項分析ではスロッピー解釈の定義が曖昧になっており、省略分析と代名詞分析との間で齟齬が生じている。スロッピー解釈の議論によって、省略分析か代名詞分析のどちらかを決定することはできない。

<発表の流れ>
第 2 節　出自①：束縛変項によるスロッピー解釈
第 3 節　出自②：同一指示によるスロッピー解釈　　論点 1
第 4 節　出自③：話者の知識によるスロッピー解釈
第 5 節　空項研究への示唆　=>　論点 2
第 6 節　まとめと今後の課題

2. 出自①：束縛変項

スロッピー解釈の第一の出自は束縛変項 (bound variable) である。このことを示すために前もって代名詞の同一指示 (coreference) 機能と束縛変項機能を確認しておかなければならない。

(2) a. Do you know Masaharu$_i$? He$_i$ was born in Nagasaki.　(同一指示)
　　┌──束変──┐
　　b. Everyone loves his mother.　(束縛変項)
(3) ∀x (x loves x's mother)

Hoji (1990) は Sag (1976)、Williams (1977) 等の先行研究に従い、省略 (ellipsis) 現象におけるストリクト解釈は代名詞の同一指示機能、スロッピー解釈は束縛変項機能から導かれると主張している。

(4) Mike$_i$ read his$_i$ book, and Mary did [e], too.　(ストリクト解釈/スロッピー解釈)

まず、(5) のように、先行文で his が同一指示機能をもつ場合、省略箇所の his も同一指示をもつことになり、「Mike の本」というストリクト解釈が得られる。(なお、本稿ではパラレリズム (Fox 2000) を仮定している。) 次に、(6) のように、先行詞の代名詞が束縛変項として機能する場合、省略箇所の代名詞も束縛変項として機能するため、「Mary の本」というスロッピー解釈が得られる。

(5) ストリクト解釈：Mike$_i$ read his$_i$ book, and Mary did <read his$_i$ book>, too. (同一指示)
┌──束変──┐ ┌──束変──┐
(6) スロッピー解釈：Mike read his book, and Mary did <read her book>, too. (束縛変項)
(7) λx (x read x's book)

項省略を提唱した Oku (1998) は、「自分」を含む先行詞を空項位置に LF コピーすることによってスロッピー解釈が得られると主張している。束縛変項という用語が明示されているわけではないが、実質的には「自分」の持つ束縛変項機能を利用する分析になるはずである。

(8) a. 太郎は [自分の本を] 読んだ。
↓LF コピー
b. 次郎も [e] 読んだ。

ここで次のようなことが予測される。

(9) 予測：束縛変項機能を持たない代名詞はスロッピー解釈を許容しない。

この予測は次の日本語の空項のデータから正しいと判る。(10) のように、「彼」を先行詞として用いると、スロッピー解釈が得られなくなる。

(10) 太郎$_i$は彼$_i$の本を読んだ。花子も [e] 読んだ。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)

これは、Saito and Hoji (1983) などで議論されているように、「彼 (・彼女)」は一般に束縛変項として機能をもたないためであると考えることができる (坂本祐太先生 (私信))。

(11) a. 太郎$_i$は彼$_i$の本を読んだ。 (同一指示)
┌──束変──┐
b. *男子学生全員が彼の本を読んだ。 (束縛変項)

つまり、「彼」は同一指示によりストリクト解釈を許容するが (=(12))、束縛変項機能の欠如から (13) のようにスロッピー解釈を出力することはできない。

(12) 太郎は$_i$ 彼$_i$の本を読んだ。花子も <彼$_i$の本を> 読んだ。 (同一指示)
┌──束変──┐ ┌──束変──┐
(13) *太郎は 彼の本を読んだ。花子も <彼女の本を> 読んだ。 (束縛変項)

対して、例文 (1) はスロッピー解釈を許容する。これは Saito and Hoji で指摘されているように、「自分」が束縛変項としての機能をもつためだと考えられる。

(14) a. 太郎$_i$は自分$_i$の本を読んだ。 (同一指示)
┌──束変──┐
b. *男子学生全員が自分の本を読んだ。 (束縛変項)

追加データ
(15) 太郎$_i$は彼$_i$の車を見た。花子も [e] 見た。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)
(16) 太郎$_i$は彼$_i$の発言を忘れた。花子も [e] 忘れた。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)

3. 出自②：同一指示

スロッピー解釈の第二の出自は同一指示 (coreference) である。すでに述べたように、この機能は通常ストリクト解釈を導くためのものであるが、以下のような例からこの機能もスロッピー解釈の

出自となりうることが示唆される。(17) は、(10) とは異なり、二文目の主語が (文法上) 男性になっており、この場合「次郎の本」というスロッピー解釈が得られる。しかし、束縛変項機能を欠いた「彼」が先行詞であるため、その機能からスロッピー解釈を説明することはできない。本稿では、このスロッピー解釈が同一指示機能から派生されることを主張する。

(17) 太郎 $_i$ は彼 $_i$ の本を読んだ。次郎も [e] 読んだ。　(ストリクト解釈/(?)スロッピー解釈)

まず、この文のストリクト解釈は (18) のように「彼」が「太郎」と同一指示をもつことで得られる。ただし、このとき「彼」は必ずしも先行文の「太郎」と同一指示関係にある必要はなく、「次郎」と同一指示関係にあってもよいはずである。そして、そのようにして得られる解釈がスロッピー解釈だと考えられる (= (19))。

(18) 太郎は $_i$ 彼 $_i$ の本を読んだ。次郎も <彼 $_i$ の本を> 読んだ。　(ストリクト解釈)
(19) 太郎は $_i$ 彼 $_i$ の本を読んだ。次郎 $_j$ も <彼 $_j$ の本を> 読んだ。　(スロッピー解釈)

これとは対照的に、(20) に再掲する (10) のデータでは同一指示関係に基づくスロッピー解釈が得られない。なぜなら、空項の中の「彼」は文法的ジェンダーの理由から「花子」と同一指示になることはないためである。このように、同一指示によるスロッピー解釈では (束縛変項とは異なり) 文法的ジェンダーを考慮する必要がある。

(20) 太郎 $_i$ は彼 $_i$ の本を読んだ。花子も [e] 読んだ。　(ストリクト解釈/??スロッピー解釈)

(21) 太郎は $_i$ 彼 $_i$ の本を読んだ。花子も <彼 $_i$ の本を> 読んだ。　(ストリクト解釈)
(22) *太郎は $_i$ 彼 $_i$ の本を読んだ。花子 $_j$ も <彼 $_j$ の本を> 読んだ。　(スロッピー解釈)

4. 出自③：話者の知識

スロッピー解釈の第三の出自は話者の知識に起因するものである。(23) と (24) の例はスロッピー解釈を許容する。これらの例は二つの点で興味深い。まず、いずれも先行詞は「彼」になっているため束縛変項に基づくスロッピー解釈は得られない。次に、二文目の主語は「花子」であるため、文法的ジェンダーの理由から同一指示に基づくスロッピー解釈は得られない。それにもかかわらずこれらの文にはスロッピー解釈が認められる。

(23) 太郎は彼の右手を挙げた。花子も [e] 挙げた。
(24) 太郎は彼の消しゴムを人に貸してあげた。花子も [e] 人に貸してあげた。

スロッピー解釈の容認性には本人しか行わない動作 (または所有) であるかどうかという点が強く関与するようである。これには程度性が認められ、(A) に向かうにつれ話者の知識によるスロッピー解釈が得られやすくなり、(C) は話者の知識によるスロッピー解釈は得られにくくなる。

(25) A) 本人しか行わない動作 ＞B) 本人しか行わなさそうな動作 ＞C) 他の人にもできる動作

A) 本人しか行わない動作 (あるいは所有)
(26) 太郎は彼の論文を投稿した。花子も [e] 投稿した。
　＊論文の投稿は著者のみが行う行為。

(27) 太郎は彼の車を所有している。花子も [e] 所有している。
　＊他人が所有する車を所有することはできない。

(28) 太郎は彼の特技を披露した。花子も [e] 披露した。
　＊他人の特技を披露することはできない (#花子も太郎の特技を披露した)。

B) 本人しか行わなさそうな動作
(29) 太郎は自宅で彼の車を磨いた。花子も自宅で [e] 磨いた。
＊花子の自宅で太郎の車を磨く (=ストリクト解釈) ことは不可能ではないが考えにくい。

(30) 太郎はよく腕をたたいている。花子もよく [e] たたいている。
＊花子がよく太郎の腕をたたいている (=ストリクト解釈) のかもしれないが考えにくい。

(31) 太郎は彼の消しゴムを床に落とした。花子も [e] 床に落とした。
＊花子も太郎の消しゴムを床に落とした (=ストリクト解釈) のかもしれないが、自分の消しゴムを落とすシチュエーションの方が想像しやすい。

(32) 太郎は彼のハンドアウトを破った。花子も [e] 破った。
＊花子も太郎のハンドアウトを破った可能性があるが (=ストリクト解釈)、自分のハンドアウトを破るシチュエーションの方が想像しやすい。

C) 他の人にもできる動作
(33) 太郎$_i$は彼$_i$の本を読んだ。花子も [e] 読んだ。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)
(34) 太郎$_i$は彼$_i$の車を見た。花子も [e] 見た。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)
(35) 太郎$_i$は彼$_i$の発言を忘れた。花子も [e] 忘れた。 (ストリクト解釈/??スロッピー解釈)

以上、スロッピー解釈の三つの因子を示した。

<スロッピー解釈の出自>
(36) 出自①：束縛変項
出自②：同一指示
出自③：話者の知識 (特に、本人にしかできないような動作であるかどうか)

5. 空項分析との接点

5.1. スロッピー解釈を巡る齟齬

前節までにスロッピー解釈には三つの出自が認められることを論じた。近年、スロッピー解釈の多様性が共有されていないために省略分析と代名詞分析の間に齟齬が生じている。

議論を進める前に、省略分析による一般的なスロッピー解釈の導出法を再確認する。
(37) 省略分析：出自①の束縛変項によるスロッピー解釈 (第 2 節を参照)

この点を念頭に置き議論を進める。まず、代名詞分析の立場である Kasai (2014) は (38) のように語用論的照応 (pragmatically controlled anaphora) であってもスロッピー解釈 (花子の腕) が得られると主張し、省略分析を否定している (cf. Hankamer and Sag 1976)。

(38) [Watching a boy hitting his arm]
太郎：花子も [e] よくたたいているよ。 (Kasai 2014: 171)

(30) の例と同様の出自、すなわち話者の知識によるスロッピー解釈だと考えられる。ここで重要なのは、このタイプのスロッピー解釈が認められるからといって、束縛変項によるスロッピー解釈を前提とする省略分析を棄却することにはならないという点である。

次に、Hoji (2003) のデータを検討する。(39) は固有名詞を先行詞に含む例である。Hoji (2003) によれば、固有名詞は束縛変項としては機能せず、スロッピー解釈を許容しないことが予測されるが、(39) にはスロッピー解釈 (ビルの車) が認められる。

(39) ジョンがジョンの車を洗った。ビルも [e] 洗った。 (Hoji 2003, 例文 (46))

しかし、この例も束縛変項によるスロッピー解釈の存在を否定するデータには当たらない。というのも、車を洗うのは、通常、車の所有者であり、第 4 節で論じた B) 本人しか行わなさそうな動作である。これに対して、話者の知識によるスロッピー解釈の可能性を排除した以下の例ではスロッピー解釈を得にくい。(ジョンの車を眺めるのはビルであっても特に不自然ではない。)

(40) ジョンがジョンの車を眺めた。ビルも [e] 眺めた。　(ストリクト解釈/??スロッピー解釈)

この事実は、(41) のように二文目の「ジョン」が先行文中の「ジョン」と同一指示関係にあってよいためストリクト解釈を許容するが、(42) のように束縛変項機能はもたないためスロッピー解釈を許容しないと考えれば説明可能である。

(41) ジョンは$_i$ ジョン$_i$の車を眺めた。 ビルも <ジョン$_i$の車を> 眺めた。 (同一指示)
　　┌──束変──┐　　┌──束変──┐
(42) *ジョンは　ジョンの車を眺めた。ビルも　<ビルの車を> 眺めた。　(束縛変項)

要するに、Hoji (2003) の主張する束縛変項によらないスロッピー解釈 (本稿における話者の知識に基づくスロッピー解釈) は確かに存在するが、束縛変項によるスロッピー解釈も存在すると言える。

同様の議論は、代名詞 (E タイプ代名詞) 分析を主張する Miyagawa (2017) のデータにも敷衍することができる。

(43) a. 田中さんは、田中さんの年収が 20%減ったと言っているのに対し、中村さんは、[e] 20%増えたと言っている。
　　b. 警視庁は、昨年の東京都の犯罪率が上がったと発表した。福岡県警は [e] 下がったと発表した。　(Miyagawa 2017: 84)

(43) のそれぞれの項には「年収」と「犯罪率」という名詞が関与している。(a) では中村さんが他人の年収の増減を知っているとは考えにくく、また (b) では「東京都の犯罪率」という意味で解釈しようとすると「警視庁は、福岡県警は昨年の東京都の犯罪率が下がったと発表した」という解釈不能な文になってしまう。このことを考慮すると、ここでのスロッピー解釈は話者の知識に由来するスロッピー解釈であろう。

以上三つの論文のデータは代名詞分析による省略分析への批判を意図したデータである。しかしながら、本稿の指摘が妥当であれば、それぞれの論文で示されているデータは出自③の話者の知識由来のスロッピー解釈の存在を支持するものであり、出自①の束縛変項由来のスロッピー解釈の存在を否定するものではない。もしそうだとすれば、省略分析の主張は棄却されず、このことから、両分析はスロッピー解釈の異なる側面を異なる立場から論じているだけであって、実質的な分析上の対立関係にないと言うことができないだろうか。

5.2. 分析の不決定性

5.1 の議論で代名詞分析と省略分析の齟齬について論じたが、この点を踏まえた上で、代名詞分析か省略分析のどちらかを選択することはできるだろうか。この問いに関して、本稿は、スロッピー解釈のデータからはいずれかの分析に決定してしまうことはできないという立場に立つ。

省略分析、代名詞分析に基づく分析の 3 つの方向性
(44) 方向性 1: 出自①から出自③までを省略分析に取り込む。
　　方向性 2: 出自①から出自③までを代名詞分析に取り込む。
　　方向性 3: 省略分析＋代名詞分析 (ハイブリッド型)

このうち方向性 3 の存在によってスロッピー解釈の観点から二つの分析のいずれかに決めてしまうことができないと考えられる。例えば、出自①と②を省略分析から、出自③を代名詞分析から説

明することは分析上特に問題がない。ただし、ここでの意図は日本語の空項が代名詞と省略の二重性を保有していると主張することではない。

<空項研究への示唆>

(45) a.　束縛変項によるスロッピー解釈があるからといって省略だとは言い切れない。
　　b.　話者の知識によるスロッピー解釈があるからといって代名詞だとは言い切れない。

空項のスロッピー解釈の性質を解明することは重要課題であるが、二つの分析のどちらが妥当であるかを判断するにあたってはあまり有効とは言えない。

先行研究にも類似した主張がある。例えば、Merchant (2013) は本稿とは異なる論点から次のようなことを指摘している (Tomioka 2014 も参照)。

(46) スロッピー解釈があるからといって必ずしも省略であるとは言い切れない。

だが、本稿の方がスロッピー解釈を細分化している点と代名詞分析に対してもスロッピー解釈の存在が分析の直接的な証拠にならないということを論じている点で、より踏み込んだ議論であると言えまいか。

6. まとめと今後の課題

日本語の空項には三つの出自が認められる。この出自が認識されていないために省略分析と代名詞分析との間に齟齬が生じている。さらに、その齟齬が解消されたとしても、スロッピー解釈の議論によって省略分析と代名詞分析のどちらが優れているかを決定することはできず、スロッピー解釈以外の観点から二つの分析のいずれがより妥当であるかを議論する必要がある。

<今後の課題>

(47) a.　出自②は判断に揺れが大きい。ただし、出自②がなくとも第 5 節の議論は成り立つ。
　　b.　空項現象以外への応用 (particle stranding ellipsis などの省略、「そう」などの代用形)
　　c.　代名詞ソレによるスロッピー解釈 (cf. Tomioka 2014)

謝辞

本発表の内容に関して、特に坂本祐太先生と前田晃寿氏から有益なコメントを頂きました。ここに記して感謝申し上げます。本稿の内容に関する責任は発表者にあります。

参考文献

Fox, Danny. 2000. *Economy and semantic interpretation*. Cambridge, MA: MIT Press.

Hankamer, Jorge, and Ivan Sag. 1976. Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry* 7:391–426.

Hoji, Hajime. 1990. Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms., University of Southern California. [http://www.gges.org/hoji/download/upload/Hoji1990.pdf]

Hoji, Hajime. 2003. Surface and deep anaphora, sloppy identity, and experiments in syntax. In *Anaphora: A reference guide*, ed. by Andy Barrs, 172–236. Oxford: Blackwell. [http://www.gges.org/library/gges/ggesdocu/GGESpapers-public/HajimeHoji/Arizona6-03-01Usual.pdf]

Kasai, Hironobu. 2014. On the nature of null clausal complements in Japanese. *Syntax* 17:168–188.

Merchant, Jason. 2013. Diagnosing ellipsis. In *Diagnosing syntax*, ed. by Lisa L. Cheng and Norbert Corver, 537–542. Oxford: Oxford University Press.

Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement beyond phi*. Cambridge, MA: MIT Press.

Oku, Satoshi. 1998. A theory of selection and reconstruction in the minimalist program. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Sag, Ivan. 1976. Deletion and logical form. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Saito, Mamoru and Hajime Hoji. 1983. Weak crossover and move α in Japanese. *Natural Language & Linguistic Theory* 1: 245–259.

Tomioka, Satoshi. 2014. Remarks on missing arguments in Japanese. In *Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics 7* (*FAJL 7*), ed. by Shigeto Kawahara and Mika Igarashi, 251–264. Cambridge, MA: MIT, MIT Working Papers in Linguistics.

Williams, Edwin. S. 1977. Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 8:101–139.